

砂漠で探す

メーフル・ジョーシによる再話

この賢いカラスの物語は、『イソップ物語』からの再話です。カラスは、先祖を敬う時であるピトウル・パクシャの行事において特別な意味を持っています。ヴェーダの時代に起源があるこの伝統の一部として、人々は亡くなった愛する人々にささげる儀式や精神修行を行います。そのような儀式の一つが、先祖に代わって、動物に——特にイヌ、ウシ、カラスに——食べ物をささげるというものです。ささげられた食べ物は、究極的には先祖によって受け取られ、彼らに栄養を与え、満足をもたらすと言われています。

カラスのワーンは、オーストラリア中央部の砂漠の赤く焦げた広大な大地の上空を飛んでいました。飛びながら、彼が翼を巧みに傾けると——ありました！ 彼を上へ…上へと舞い上がらせ…そして青く広がる大空を軽々と滑空させる、熱い上昇気流です。それは彼が母から学んだ技でした——風の乗り方、彼の家族に何世代にもわたって受け継がれてきたカラスの技でした。

ワーンは眼下の大地を観察しました。最後に降った雨の後に、太陽に焼かれた大地を短期間覆っていた野生の花の輝く原野は、とっくになくなっていました。残されたものは、ゴーゴーと吹く風で長い風紋ができた、さびた砂丘だけでした。

突き抜けるような青い空を背に、ワーンの輝く漆黒の羽は、容赦ない太陽の下できらめいているようでした。その羽毛は水に浸かったかのようでした。でも、どうしてそんなことがあり得たので

しょう？ この干ばつは、ワーンが覚えているどの干ばつよりもさらに激烈で、100 日以上、一滴の雨も降っていなかったのです。カラスの喉の渇きは、彼に起こり得る最期を絶え間なく思い出させていました。

この数日間、ワーンは上空から水を探していましたが、成果はありませんでした。

大丈夫！ ワーンはカラスです。彼は諦めません。彼は疲れた目でもう一度、眼下の砂漠地帯を入念に調べました。

突然、彼は何かを見つけました。熱は波のように地面からゆらめき、形をゆがめています。彼の気のせいでしょうか？

いいえ！ それはありました。彼が降下すると目に入ってきました。掘っ立て小屋の残骸とのかやぶき屋根、そしてそこには日陰がありました。貴重な日陰！ 日陰は、砂漠の焼け付くような暑さを大きく和らげるものとして、動物たち、アボリジニや開拓者たちに知られていました。ワーンの内側で、お母さんのリズミカルな歌が湧き上がってきました。「日陰は貴重。日陰は命」。彼は翼を畳み、あばら屋に向かって急降下しました。

涼しい日陰にある壁から突き出た棚にワーンが着地すると、何かが棚の上にあるのが見えました——容器でした。すぐさま、彼の賢いマインドは駆け巡りました。彼がその容器をつついて調べると、内側から間違いようのない、チャプチャプという音が聞こえました。水です！ それはこの見捨てられた小屋の棚の上に取り残された、水の入れ物でした。

まさに、それは奇跡でした。「ワアアア」。ワーンは、彼の名前のように聞こえるカラスの鋭い鳴き声を出しました。「ワアアア」。大喜びです！

ワーンは水の入れ物の隣に止まり、翼を広げました。入れ物は太い胴体から背の高い注ぎ口へと急に細くなっている形で、てっぺんはコルク栓で密封されていました。

ワーンは直ちに作業に取り掛かりました。彼は爪で入れ物の注ぎ口を押さえ、くちばしで栓をしっかりとくわえ、狂ったように羽をばたつかせ、力の限り引っ張りました。しかし栓はびくともしません。

ワーンは後ろに下がって入れ物を眺めました。するとまた、お母さんが耳元でささやいているような気がしました。「戦略は力に勝る」。ワーンは一方に首をかしげて考えました。自分の戦略とは何だろう？ 彼はくちばしの使い方を工夫し、今度は引っ張るよりは、ねじったり、回したり、こじ開けようとしたりしました。

そして思った通り、嬉しい「ポン」という音と共に、栓がはずれました。

ワーンは、入れ物の底にある命を救う水にくちばしを伸ばしました。しかし、どんなに頑張っても、狭い注ぎ口の部分に自分の頭を通し、彼をじらす底の水に届くことができません。

一体彼に何ができたでしょう？

彼は器を傾けようとした。重過ぎます。

棒で水をすくおうとした。手間が掛かり過ぎます。

石で注ぎ口を割ろうとした。頑丈過ぎます。

ワーンは思案しました。いつもなら創造力に富む彼のマインドの空間は、眼前のほこりっぽい砂漠を吹き流される乾燥したスピニフェックス草の塊のように乾いて、何のアイデアもないように感じられました。

彼は記憶をずっと、ずっと奥深くたどりました。

すると、思い浮かんだのです。答えではなく質問です——お母さんだったら、どうするだろう？

ワーンのお母さんは、博識なカラスでした。彼女は、すべての難題は世界を新しい目で見ると
めの機会だと見ていました。

昔、おなかをすかした自分たちの群れが鍵の掛かった穀物倉庫に入れなかった時、ワーンのお母さんは、ゆっくり回転している換気扇を潜り抜け、鍵形に曲がる縦溝を通して穀物までたどり着き、また戻ってくる方法をやって見せたことがありました——無傷で！ それは胸がすく出来事でした。

元気を得て、ワーンは空中に舞い上がって小屋のすぐ上を旋回し始め、何かないか、可能な解決策はないかと模索しました。

ワーンは、小さい灰黒色の鉄鉱石が辺り一帯に散らばっていることに気づきました。この地方のオパール
の鉱山の名残です。どんよりした赤い砂を背景に、黒い石は、彼を見上げるたくさんの明るい黒い目のように際立って見えました——それは、仲間の群れが近くにいるということを彼に思い出させました。

すると、お母さんがみんなに言った言葉を思い出しました。「みんなで力を合わせなさい」とよく言ったものです。「そうすれば、やらねばならないことは、何でもできます！」

「もちろんだ！」と、ワーンは思いました。

行動を起こすよう呼び掛ける鋭く甲高い鳴き声で、ワーンは残りの群れを召集しました。

数秒後、翼の影の群れが天空から舞い降りて来ました。群れが翼を畳む時に、羽の疾風がワーンを包みました。「ワァァァ ワァァァ」と、彼らは一斉に彼の名前を呼びました。それから静かになり、彼らはワーンを心待ちに見ました。

ワーンは勢いよく降下すると、くちばしで石を一つつまみ、それを入れ物の中に落としました。そしてまた一つ、もう一つ。忠実に、他のカラスも、誰かに振り付けされた空中ダンスをしているかのように、同じことをしました。

ゆっくりと、しかし確実に、石を入れるごとに、水は次第に入れ物の上部まで上がってきました。

そして完全に上がると、1羽ずつ、カラスは順番に入れ物の口まで頭を下げて、喉の渴きを潤したのです。

